

江戸中期以降における民衆教育の研究 — 越後新発田藩の事例を中心として —

大山 正義[†]

A study of education for ordinary people in the mid to late Edo period,
with mainly focusing on research of the Shibata domain

Masayoshi Oyama

1. はじめに

第二次世界大戦後、日本は存亡の難題が国家と地方を襲った。ほとんどの国民が一からの再出発を潜り抜け、豊かさを求め、その象徴としての中流階級を全国民が目指し一致団結していった。その後の高度経済成長期を駆け上がり、世界的にも経済的な豊かさを誇った。そんな経済的成长の中でも、古くから続く「良き日本」そして「良き地域」を国民一人ひとりがお互いに連携を図りながら維持してきた。しかしながら、その後のバブル期とその崩壊、そして長期のデフレ期を経て、我が国における中流階級の体制が崩壊してきた。それは貧富の差や経済格差を意味し、それは拡大していく格差社会と今まで経験したことのない超高齢少子社会たる今の日本を物語っている。そんな中、日本政府は将来的な地方交付税交付金の減額も想定した国内の「平成の市町村大合併」を促進させた。その結果、各地方（地域）における希薄化が一層進み、教育を担う地域や家庭、そして学校の教育や人材育成において好ましくない状況が続いている。とりわけ多くの地方（地域）においては格差の更なる拡大が見られ、その地域の形骸化に加え、地域連帯感の欠落と家庭間の孤立により、地域社会の更なる崩壊へと繋がっている。それは戦後欧米の指示の下、新自由主義社会の欧米を追い続けてきた現代日本社会の末路のように感じられる。今まさに必要なのは日本の古き良き地方を取り戻し、そして活性化し創生させることであり、そのためにも「良き日本」そして「良き地域」時代が充実してきた江戸中期以降における特に教育や人材育成・活用が、地方においてどのようになされてきたのかを探究することの必要性を切に感じた。とりわけ、我が故郷新発田市は江戸時代新発田藩の領地を有しており、その地における公的（藩校）及び私的（私塾）な人材育成は、全国的にも例をみないほど充実していたことを本研究により明らかにしたいと考えた。

2. 全国的な私塾の開設とその時代背景

江戸中期以降になると、奢侈や華美になった風潮を否定し、質素儉約や新たな経済政策の必要に迫られ、幕府のみならず全国の藩においても藩政改革や地方文化的な発展のため、新たな人材養成が求められるようになる。また、各藩による藩士養成校が設立されるだけでなく、地域によっては身分に關係なく若者対象の学び舎の「私塾（家塾）」が、全国的に出現するようになる。この場合の私塾とは、当時の「寺子屋（手習い所）」を終えた若者を原則対象としている。また、経済的に裕福かつ人的交流が比較的しやすい郷村地域においては、村内の更なる繁栄や災害等の対策もあり、実学習得のための人材育成の気運が高まっていく。そのような郷村等の独自による「村塾（郷塾）」も、城下から遠隔地にある郷村においても開設されるようになる。それは「自存自衛」の精神の高まりとも言え、人口増加等に伴う暮らしの繁栄や災害対策や地域の課題解決ための人材が地方においても求められ、現に育成し輩出していくようになる。

2.1 歴史的背景

1) 武断政治（武威）から文治政治（文治主義）への転換
江戸時代中期を過ぎると、各藩の武士も事務的経営管理や財政基盤整備、そして企画開発等の能力が望まれるようにになった。また、紙の品質の向上と価格の低下で一般民衆にも購入できる状況になり、印刷物の価格低下や普及、それに伴う学習環境の向上にもつながった。

2) 各藩の財政難事情 上記同様各藩の財政的厳しさが増す。大きな要因として、武断時代から変わらぬ人件費の圧迫があった。加えて、華やかな文化が栄えた時代の浪費や幕府からのお手伝い普請も要因であった。更に人口の増加や天候不順や災害による享保以降の飢饉も財政難に拍車をかけた。

[†]2024年度修了（人間発達科学プログラム）

3) 新田開発と米の生産性向上の必要性 当時の主力産業である稻作産業の生産性の向上が前述に合わせ、各藩のみならず幕府の財政力を豊かにしていった。新たな開墾地を増やすための土木工事（特に河川や湖水の治水・干拓工事）の技術開発が求められるとともに、農産物の生産性向上のための農業技術、米の品種改良や生産効率のよい肥料の開発が求められた。

4) 街道・海運・水運の整備結果による流通と人の往来の活発化 街道や海運・河川の整備に加え、宿場町等の充実・発展は物流の活性化だけでなく、一般民衆の往来も江戸中期以降、飛躍的に盛んになった。観光のみならず、向学心に燃えた地方の若者の全国各地への遊学熱にも影響を与えた。それと伴い各種情報も拡散され、その結果、評判となる私塾は遠隔地でも入塾者が集まるようになる。

5) 浅間山大噴火以降の連続複合的災害の影響 18世後期の浅間山大噴火とその後の複合的災害に見舞われた。いち早く人材育成に取り組んだ熊本藩は財政難を克服し、10万両の災害救済金を幕府に拠出している。災害対応として幕府の公助のみならず、共助が復興地では村方三役を中心に行われた。その中には地域の復興を主導し、名望家としての役割と責任を果たしていく。幕府も大惨事にも適切に対応できる官僚の養成の必要性を感じた。

6) 郷村単位での人材育成の必要性 「まちづくりは人づくり」という概念は、各藩の藩士だけでなく、民衆の人材育成にも浸透し、それに従い領内の郷村（庄屋や名主の管理地）にも拡大していく。そのような中、度重なる災害や飢饉により各郷村単位でも必要な人材育成が叫ばれた。寺子屋レベルの学びに加え、「自営自尊」的観念から実学的な学びを続ける者もいた。地元の名望家（名主や庄屋）等の学びの場が私塾へと発展し、それを当該藩が認証し助成した。郷村単位の問題を村方三役管理の下、各郷村内で解決していく地方自治体制が、幕府を地方から支えた。

7) 幕藩体制の衰退の影響 18世紀後期になると日本の沿岸に外国船が多く出没し鎖国体制が揺らぐようになる。その後の有識者への弾圧となる蛮社の獄に見られる幕府の言論制圧、そして天保の飢饉による陽明学者大塩平八郎の乱や越後の国学者生田萬の乱により幕府の権威は一層揺らぎ始めた。そして黒船来航以降、水戸藩を中心に尊王攘夷思想が芽生えるようになる。一方、従来からの儒学を中心とした学びのほか、国学の復興そして新しい蘭学等の洋学の習得や情報収集と分析を通して、地域によっては尊王（勤皇）開国（開明）論が占めるようになつた。

2.2 社会的（文化的）背景

1) 文化的かつ教学的施策の高まり 江戸中期以降、初等教育機関である寺子屋が出現し、日本の識字率は当時の世界一を誇れるようになる。それに合わせて向学心に燃え、その後も更なる高等な学びの場が求められていった。その対象となる民衆の学問所が「私塾」である。また化政期の各種芸術文化が民衆においても隆盛を極めるようになる。

その芸術文化は実学教育や思想を究めたい若者にも受け入れられ、逆にそれが実学志向においても必須となっていく。寛政期以降の幕府としても、儒学思想の浸透を取り入れた教学政策により、行き詰まり見せた幕藩体制を地域から再生しようとしたことも見逃せない。また、そのような民衆を含めた地方の若者は一か所の私塾等に留まらず、全国を行脚するような遊学する者も少なくなく、それによる情報交換や評判の拡大につながっていく。

2) 家庭教育と職業教育の充実の必要性 上述期においては、特に商工業の担い手育成を図るため、家庭教育が民衆内においても特に家長自らが戸主制度に基づいて行われるようになる。それは単なる躰・礼儀作法のみならず、基本的な手習いや商売教育などが施されるようになる。そして、更なる向上を図るため外部講師の招致や学問所への通学を望むようになる。また、前述の通り農業分野の担い手にも農業振興の実学教育が求められるようになる。

3) 日本における儒学（漢学）の開祖とその発展と継承 日本国内における儒学は戦国時代の後期、京都において仏教信者により芽生え、それが儒学者へと移行していく。日本における儒学の開祖的存在が藤原惺窓である。その門人に林羅山と松永尺五がいた。林羅山は徳川家光によって重用され江戸にその後林家朱子学の幕府公認の家塾を開設し、松永は京都にて家塾（講習堂）を開設し、それが伊藤仁斎（古義堂）へと継承されていった。その講習堂の門人には木下順庵がおり、またその門人に正徳の治の新井白石がいた。その後、各種学問領域は朱子学（道学、宋学）へと派生していく。反朱子学派の一つとして、中江藤樹を開祖とする陽明学派、その他には本来の孔子の教えに帰依する荻生徂徠が唱える古文辞学（徂徠学、ソリューション学派）があった。また、垂加神道との合体である山崎闇斎の崎門学派などもあり、本論の主体となる新発田藩が唯一の学問とするのが、この学派である。また、他の学問領域を合わせても折衷学も存在するようになり、多様な学びを求めるようになっていった。そして陽明学派の大塩平八郎は、天保飢饉の幕府対応に抗議し反乱を起こした。

4) 国学の復興（日本古来の良き古典学のルネサンス） 儒教以前の神ながらの古代精神や人間的生命の根源を求める精神的なる古代への復興運動が、江戸中期以降に国学を通して起きた。国の保護の下に国教化し日常的な精神性に堕落した仏教に反発するとともに、江戸幕府の御用学問化した儒教を批判し、自然な人間性と事由の確立を追求していく。その代表的国学者として荷田春満、賀茂真淵、本居宣長そして平田篤胤の4人があげられる。

5) 藩校の出現 前述のように多種多様な状況に対応すべく、有力藩では今の地方自治体の公務員である藩士を養成する藩校が元禄期前後に開校され始めた。そして、財政難等の緊縮財政対応のための人材育成による藩校は、寛政期以降に多く開校されていくことなる。その必要性に伴う開校の早さや学び舎の拡充により、結果的に幕末における討幕有力藩へと移行していく藩も出現する。そして幕末の

江戸中期以降における民衆教育の研究
— 越後新発田藩の事例を中心として —

頃になると、国内にあるほぼ全藩において設立されるようになった（255校）。寛政期において幕府の学問奨励政策としては、林家朱子学の家塾を幕府官立となる昌平塾（昌平坂学問所）が、寛政改革を主導する老中松平定信1790年に開設された。それ以降の昌平塾の学頭は、林羅山系統の林家が担っていく。その寛政改革の中で、「寛政異学の禁」が施行され、官公立の学問所では、林家朱子学以外の指導は原則禁止された。

表1 全国における藩校一覧（抜粋）

藩名	藩校名称	設立年
岡山藩	岡山学校	1669年
長州藩	明倫館	1718年 注1
熊本藩	時習館	1755年
新発田藩	道学堂	1772年
薩摩藩	造士館	1773年
松代藩	文武学校 注2	1855年

【注1 1715年享保期設立開始】

【注2 松代藩士の佐久間象山が設立を提唱し開校】

6) 洋学（蘭学）の出現と発展 18世紀末期の蘭学者杉野玄白等の解体新書により、日本における蘭方医学が飛躍的に発展した。その後のドイツ人医学者のシーボルトの鳴滝塾へと蘭学への高まり志向は受け継がれていく。天保期、その門人の高野長英や三河田原藩の渡辺華山は、医学や飢餓対策の農学等に留まらず、その矛先は幕府批判（開国・開明論）にもおよび、その弾圧として蛮社の獄が幕府老中水野忠邦の下、江戸町奉行鳥居耀蔵によって行われた。この鳥居の実父は幕府官立の学問所である昌平塾の大学頭を務めた儒者の林述斎であり、特に異学である洋学には排他心かつ敵対心を抱いていた。結果的にそのような理不尽なる弾圧が世論のわだかまりとなり、幕府衰退の始まりとなっていました。

3. 新発田藩の自然・社会的かつ歴史的背景

新発田藩は極めて特殊な条件と稀有な社会的課題や問題を抱えていた。城主溝口家は元々豊臣秀吉に仕えていたが、関ヶ原合戦以後の加賀大聖寺から越後新発田へ移封となり、自然・地理的かつ社会的課題を移封当時から抱えることになった。そのため藩の存亡を図っていくためには、他藩に見られる政策に加え、独自の学問奨励や各領地内の人材の育成においても、その解決策を早くから見出していく必要性が新発田藩にはあった。

3.1 地理的かつ自然的要因

新潟県には大小関わらず1,167もの河川が存在し、国内でも有数の沖積（堆積）平野が広がっており、国内濃尾平野と並んで一大穀倉地帯を有している。とりわけ、新発田藩は国内二大河川である信濃川（国内最長）と阿賀野川（国内河川幅最長）の両河川を抱えるとともに、多くの湖

水（三日月湖、潟湖）の存在が、稲作に古くから大きな影響を与えてきた。つまり、その多くの大河川によって越後平野には肥沃な土地が広がることになった。加えて、冬場の豪雪とその有機的肥料成分を含む雪解け水により、稲作に必要な水資源には困ることなく、良質米が収穫できる半面、その河川の氾濫による水害により、その災害課題を解決するべく土木工事に関する技能・技術が求められる土壤が、古くから新発田藩の領内においては存在していた。新発田藩を含む蒲原郡において、各領地内の人材育成強化が始まり拡充していく1700年代から1800年代中頃にかけ、財政基盤である米の生産高も比例して極端に伸びている。

3.2 社会的かつ歴史的要因

新発田藩は南北に譜代大名（村上藩や長岡藩など）、そして西は日本海に面し、東に親藩大名（会津藩）に三方囲まれた唯一の外様大名であった。それゆえ、江戸時代開府当初からその葛藤と改易抑止との闘いの中、その活路を独自の情報戦略と分析で見出す必要があった。その発端として、17世紀中期に起きた親藩会津藩による嫌がらせ事件（塩止め事件：会津藩による新発田藩士 井上久助処刑）がある。その結果、新発田藩は幕府を始め周囲の藩への対応等に神経をとがらせる必要があった。そのような気概や精神が古くから藩内に根づいていた。それにより藩の生き残りかけた情報戦略と交渉術を磨くため、学問奨励施策（その後の尊王思想）が藩士のみならず、民衆にも広がっていった。

3.3 米の生産性の要因

越後国内でも新発田藩領内は有数の穀倉地帯であった故の闘いと幕府からの米生産高拡大への過度の期待もあった。享保以降、新田開発と生産技術の向上による米の積極的な増産命令が幕府からあった。それは、享保以降の飢餓や災害等による米の減収になった場合、そのたびごとに新発田藩から幕府への速やかに報告されたことでも伺える。特に天明以降の天候不順と度重なる河川災害が越後国内でも多く見られた。

3.4 早期からの藩主による学ぶことへの政策の定着

地理的かつ社会的にも隔離された外様大名であるがゆえの独自路線により、早くから独自の学問奨励による尊王思想（垂加神道思想）が、藩内全体に早くから定着していたことは言うまでもない。それはやはり、新発田藩3代以降の歴代藩主の意向や政策も大きかったと考える。のちに新発田藩の藩学となる山崎闇斎の教えである崎門学は、儒学と神道を一体化した学問であり、京都公家の間で浸透していった。それが新発田藩領内における尊王思想の浸透の始まりともなった。

4. 新発田藩内の人材育成術

越後国内では新発田藩が、一番早くに学問奨励策をあら

ゆる角度から着手した。その根底にあるのが新発田藩の初代から培われてきた士庶同学の精神であった。それを藩主のみならず、藩の改易抑止をかけた藩士が呼応し、それを理解した民衆との精神的共有と行動のコラボレーションが、早くから定着したことは言うまでもない。特に学問奨励策を強化させた8代藩主直養が、「学問上の身分の差はない政策」を強く打ち出した影響も大きかったと言える。直養の時代に越後区内では最初の藩校そして医学校が設立されるが、藩士のみならず、藩校においては有能な一般民衆の聽講も許可した。これにより、各藩領内の郷村単位でも教える場が庄屋や名主宅に整備され、それがのちに有能かつ学識ある庄屋自らが私塾を開設する方向へと発展していくものもあった。全国的にも稀有な独自人材育成が、結果的に戊辰北越戦争時の新発田藩の成果へとつながった。つまり、同じ越後長岡藩のように領内が荒廃し藩士や領民が焼け出されることを、新発田藩の場合は藩士と民衆による協働によって防いだ。その結果、民衆おいても一人の犠牲者を出すことなく新発田藩内における安泰へとつながったことは言うまでもない。

4.1 思想的学問以外に実学が求められた背景など

新発田藩における地理的・自然的要因と社会的・歴史的要因が、実学が民衆にも必然的に求められた背景となっている。教養的な学問だけでなく、暮らしを豊かにする学術が求められたのである。

4.2 歴代の藩主の学問奨励策の変遷

初めて藩学が設けられたのは、4代藩主の時代である。4代溝口重雄は学問好きの江戸幕府5代将軍徳川綱吉の江戸城での講義を聽講した。5代は小浜玄篤を招き城内で聽講するが、その後伊藤仁斎の門弟を藩士に召し抱え、藩の学問の師範役を命じた。7代藩主時代に後述のとおり、伊藤仁斎の学問が藩で採用されていた。

4.3 8代藩主による一般民衆向け学問奨励策

直養の政治はまさに山崎闇斎の教えに基づいた仁政を展開し、多くの改革や事業を実践した。その中で民衆も藩士同様、人的財産であるという信条が強かった。仁政とは情け深い政治という意味である。

1) 「士庶同学」の精神 学問奨励布告「勧学筆記」を自ら書し民衆にも読見を勧めた。

2) 教科書等の印刷 当時の他国他藩ではほとんど見られなかった教科書等の印刷を藩命として行い新発田藩領内に広く配布した。当時の印刷物は高価であり入手困難な状況であった。藩校内には御版行方と称する出版に携わる役人が置かれ、教科書等の印刷を行った。印刷された教科書等は学問に熱心な庶民には褒賞として配布され、希望者には紙代だけの実費で貧困者には無償で配布された。

3) 社講制度と褒章制度の導入 8代藩主は、従来の処罰ではなく善行者の表彰に力を入れた。

4) 藩校「道学堂」設立のねらい 8代藩主に着任すると初めて学問奨励の論告を出した。これにより、子どもの教育は保護者の責任にて行われることが明記された。学問を奨励するには講義場所も必要ということで、藩校の普請を儒学者でもある石原寛信などに命じ、1772年に開学した。その4年後には藩校を再度PRし、家臣には老若に限らず学問を奨励した。最初は藩士向けの藩校であったが、後に民衆にも聽講の門戸を広げ、向学心のある民衆の聽講も少なくなかった。

4.4 藩学とした山崎闇斎の崎門学の指定理由

これは8代藩主の意向に尽きる。彼は13歳の際、江戸藩邸において父である7代藩主直温の側近藩士で、儒者でもある石原寛信に学問を勧められ、一念発起勉学に志す一方、父の許可を得て石原を自らの補佐とした。山崎闇斎の崎門学に傾倒していた石原寛信が、7代藩主直温に仕え、8代藩主直養に重用されるのが起因である。石原は山崎闇斎の崎門学に信奉し、その門下の稻葉迂斎に師事する。8代藩主もこの稻葉迂斎に直接師事していたのも要因である。その点を考えると、今の信仰宗教の信者に近いものがあったようにも感じられる。

4.5 崎門学以外の儒学や国学との関係性

8代藩主は治世の終わり近くになって山崎闇斎の崎門学を推奨し、他の学問を禁じた。幕府の寛政の改革に見られるような「異学の禁」とは称しなかったが、他の学問は正統ではないと訴えた。新発田藩内では、元禄期あたりから荻生徂徠の古文辞学も広く学ばれており、加えて7代藩主時代の頃は伊藤仁斎の系統学が藩で採用されていた。また、後述の新津地区桂家では古くから伊藤仁斎の学問や国学も学ばれていたが、表面的には8代以降の藩主はそれを罰している。

4.6 寺子屋の実態と私塾との関係性

寺子屋は江戸時代の民衆の教育機関の名称で、初めの頃は寺院において行われていたので、この名称が使われている。神官・医者・僧侶などが師匠となり、読み書きそろばんを主として教え、女子の場合は裁縫を教えるところもあった。新発田城下には26か所の寺子屋があった。就学年齢は6歳7歳が多く、在学期間は3年～5年で、授業時間は概ね午前8時～午後4時で、生徒数は30人～60人であった。教科書としては素読用に「四書五経」、「童子教」などで、習字用には「往来物」、「いろは歌」などがあった。授業は今で言うマンツーマン指導がとられ、師匠が個人的に教えるほか、兄弟子、あるいは師匠の家族が助手役となって補助するなど、人間味ある個人教授であった。多くの民衆の子どもは寺子屋で学業を終了するが、更なる学問の追究と志高き若者はその後、高等教育機関の私塾に志願するようになる。

4.7 私塾と藩（藩校）との関係性

基本的には新発田藩の藩校と私塾との交流はなかったと言える。今で言う塾の許認可は藩ではなく、自由に開学できたのも要因にある。また、民衆でも藩校の講義を自由に聴講はでき、藩からは各種教科書の印刷配布もあったのは他藩においてあまり例はない。ただ逆に新発田藩の藩士が私塾に通うことはあったという記述はある。

4.8 新発田藩独自の民衆教育制度である「社講制度」

8代藩主独自の教育施策に「社講制度」がある。社講とは、藩内各郷村で行われた講書の会に講師を勤める者の称である。新発田藩領内には各郷村（庄屋管理）を束ねた「組」が14あったが、その組を管理するのが大庄屋となる。今で言う庄屋が村長とすれば、大庄屋は県知事レベルと推察する。8代藩主は、この14組に14人の社講をそれぞれの組内の人材で任命した。組内で適切な人材が見つからないと、他の組から組換えさせられた。旧新発田藩の領地は、現在の新発田市中心部から半径約70kmにも及んでいた。社講は他にあまり類例がないが、社という字は土地の神を意味し、これが転じて社、あるいは民間団体の意に用いられた。社講が講義を行う場所の多くは庄屋や名主宅であった。これらを社講所と言った。社講の出現は8代藩主の時代であった。この要因として、藩校である「道学堂」に一般民衆の聴講者が横溢するという盛況を見たため、大きくその建て替えを命じたが、普請が成って開講はしたものの近郷の庶民の多くが藩校に出向いて聴講することには何かと不便があったことが挙げられる。なお、社講の名称が公の記録に出てくるのは、藩校設立の7年後に8代藩主が藩校の講堂へ出席したのが最初であった。その後において社講による講義のみならず、8代藩主時代の藩当局は庶民教育政策の徹底を期し、藩命により篤学実行の藩士（藩校教授職）を各郷村へ送り込み、藩内を巡幸し経書を講じて指導に当たっている。この社講制度が新発田藩領内の隅々まで整備され、郷村の農民までもが身近に学問を感じ、更なる学問追究していったことは、他藩や天領ではみられない人材育成制度であったことは言うまでもない。

4.9 新発田藩独自の一般民衆学問奨励・報償制度

8代藩主は藩校の「道学堂」を建設し、身分に関係なく藩士も民衆も皆学ぶべしというお触れを出し民衆教育を推進した。このような民衆教育への熱意とこれに応える民衆の好学の風が相まって社講制度が拡充されていく。その結果、社講制度設定以来功労があった者は歴代に渡り表彰した。表彰者の職業をみると、庄屋など村役人が多く、商人や神官もいるが、新発田藩城下では町検及び商人も対象になっている。

4.10 新発田藩における私塾

8代藩主以降、新発田藩の藩学は山崎闇斎の崎門学とし、それ以外を異学とした。ただ、その異学の禁を藩内に告

知はするが、必ずしも処罰の対象になっておらず、幕府の寛政改革とともに同様である。以下の私塾のうち、積善堂ではその門下生に民衆（商人、農民、寺院住職、医者等）のほか、一部藩士の通学もみられた。

1) 積善堂（丹羽伯弘） 丹羽伯弘の教え「学問は自己の名声にあらず、先人の智慧を知り人の道を説くもの」と新発田藩領内における教育基盤を整備したと言っても過言ではなく、教育への志と熱意は他の追随を許さなかったと感じている。積善堂は今的新潟県立西新発田高校の敷地内にあり、それ故この地は新発田藩の領内区分として城下の新発田組に位置していた。丹羽伯弘は1795年丹羽家の長男として生まれる。父の跡を継ぎ藩の郡廻り役という軽輩の身分であったが、幼少より才があった。29歳時に公務の傍ら、自宅で私塾を開塾し子弟の教育を始めた。塾則は14か条からなっており、授業は毎朝6時からの3時間で授業内容は素読と習字が中心だった。教科書は塾生の学力に合わせたが、四書五経が基本であった。1825年丹羽伯弘30歳の時に藩命で江戸遊学を命じられた。江戸在勤中の5年間新発田藩としては異学の「林家朱子学」に事前に許可なく入門したことにより、後に藩校道学堂の教授らに指弾され、藩士の身分を剥奪され、永遠に藩士身分を失うことになった。学齢奨励に熱い10代藩主は丹羽伯弘をかばおうとしたが、在任藩校の教授らに反対で断念せざるを得なかつた。免職後も私塾の塾長は辞めることなく亡くなるまで続けた。後述の大野恆堂や小川心斎などの教育者を育てるとともに博学多識で詩文に長じ絵画を解し、また琴も奏でた。この点は江戸滞在中に親交のあった佐久間象山や梁川星巣とも馬が合つたと言われる。

2) 絆己楼（上記の丹羽門下の大野恆堂） 現聖籠町諷訪山に位置し、領内区分の五十公野組に位置していた。前述の丹羽伯弘門下として後述の小川心斎と並んで積善堂の優秀さを誇った。1807年に聖籠諷訪山の代々続く庄屋の家に生まれた。1853年先人の庄屋が建設した学古堂の塾舎として絆己楼を建設し、200人を超える塾生への漢学教授に尽力した。「新発田史」では、江戸後期の名だたる新発田藩領内の私塾の一つとして絆己楼が選ばれている。新発田藩では、藩校のみならず藩内のすべての学塾などでも、崎門朱子学を以外の学問は禁止とするお触れを発令する。絆己楼でも表面上この禁止を無視することはなかったが、大野が主とした学問は、新発田藩士だった丹羽伯弘が重視する林家朱子学だった。後に社講にも任命され藩学教授格にもなり、尊王攘夷を唱えた。著作として「国体論」や「神風実記」などがある。江戸末期の文久年間からの20年はこの塾の繁忙期であった。幕末騒乱期には、北越各地の村役人や富豪の子弟、寺院住職などが入門した。無頼屋と言われた阪口安吾の父の阪口五峰（仁一郎）も塾生であった。大野恆堂の次男であった大野誠も父親から教えを受け、17歳で江戸に出て昌平黌に入学するが、後に古賀謹一郎の私塾で学んでいる。一時帰郷し父親と共に庄屋としての職務に精励するとともに、絆己楼の塾生に学問指導や剣術指導を

行う。40歳の時に最高権力者の一人である伊藤博文の配下で、日本国への施政も貢献することになる。その後、長野県令にも任命され、県令に着任と同時に絆己楼で教授した故郷の同志を数多く長野県庁職員として採用している。

3) 小川心斎の庄屋宅（塾名なし） 本塾は新発田組の島潟に位置していた。前述の積善堂門下から大勢の秀才を輩出したが、その中でも聖籠諫訪山の大野恵堂、そして新発田組島潟の小川心斎の2人は「出藍の誉」と言われた。出藍とは弟子が師よりも優秀であることをたとえ荀子の教える一篇である。小川心斎は丹羽伯弘に学ぶとともに、江戸の安積良斎にも師事している。新発田組の大庄屋の傍ら、史学、詩文を著述するなど、越後国の片田舎の独学者としては珍しい著作を残している。史学の中でも古今史である鎌倉時代の歴史を専門とした。大庄屋としての任務として、新発田藩領内にある三大河川の一つ地元加治川の治水工事に尽力したことに加え、北越戊辰戦争では新発田藩を説き、新政府軍側につかせた。小川心斎の私塾開塾を宣言した記述は乏しいが、大庄屋ゆえに多くの門人や地域領民が平素庄屋宅に集まっていた。戊辰戦争においては新政府軍の新潟上陸に対し多大なる尽力を果たした。その際に領民をわずかの間に大動員できたのは、藩と庄屋、検断（町役人）と町、村役人の緊密な連絡あっての蜂起であり、特に小川心斎の判断とその力量については賞賛に値する。加えて、新発田藩領内を焼け野原にしなかったことも小川心斎の功績と言ってもよい。

4) 坂井経堂による庄屋宅（塾名なし） 本塾は岡方組に位置していた。経堂は現新潟市北区上大月の名主の長男として生まれた。坂井家は代々村名主を務め近郊きっての大地主だった。若くして江戸に出て昌平黌の塾頭の佐藤一斎に学び、3000人の門下生の中でも俊秀の組に列せられた。29歳で帰村後は名主職を継ぐとともに、私塾を開塾し1847年には藩から社講に任命される。指導の傍ら村内の水害対策に講じるため植栽事業にも専念した。天保の飢饉後の尊王攘夷の機運が高まると、名主職を辞し江戸に渡って尊王攘夷運動を起こそうとする寸前に早世した。北越戊辰戦争で奮戦した岡方組正氣隊員の中には坂井経堂の教え子が多く、加えてこの地一体の農兵隊は直背間接的に経堂の教え子も多く、経堂の勤皇思想の遺志を継承していく。その筆頭が同じく岡方組の曾我士郎であった。士郎は経堂門下では数年で塾頭になる。経堂の死後は門下生を私邸に引き、寄宿しながら教授を続ける。幕末騒乱時には勤王の志を抱き、桜田門外の変後は私財を投じて私邸に武道場を建設した。

5) 光晴塾（曾我簡堂） 本塾は上記同様岡方組に位置していた。現新潟市北区浦木の百姓の長男として生まれた。村屈指の資産家で簡堂は幼少期から学問に励み坂井経堂の私塾に入門し経学を修めた。その後7年間、大橋訥庵の恩師で朱子学を、陽明学を昌平黌の指導者である佐藤一斎に学び、1855年に帰村し光晴塾を開塾した。その後、度々藩主に経学を講じるとともに、社講として士籍を列し

た。北越戊辰戦争では前述の曾我士郎率いる正氣隊の軍監として米沢口の戦いや会津との角石原の戦いに従軍している。維新後すぐの1870年には堀越郷学校の指導者となり、文部省から郷学校での功績を讃えられている。簡堂が開塾した光晴塾の名称は、現新潟市立光晴中学校に受け継がれている。

6) 遠藤七郎による庄屋宅（塾名なし） 本塾は岡方組の隣である川北組に位置していた。現在川北組も岡方組も同じ新潟市北区にあるが、当時遠藤と同じ世代である曾我士郎や曾我簡堂（前述）と交流したことは記録上残っていない。その要因として学問分野が異なっていたことや、対外的な交流相手が違っていたことがあげられる。庄屋の長男として生まれる。七郎の思想や行動は黒船来航など、多感な少年期を過ごした。加えて、父親より小さい頃から国学を学び、親が招いた国学者平田篤胤門下の鈴木重胤と交流があったことが国学への道へとつながった。加えて、20歳を過ぎた頃から全国各地を巡り勤王の志士と交流したことや庄屋の家に生まれたことなどが、七郎の人生を左右した。戊辰戦争直前まで庄屋を務める中で、水害などで米価が高騰し、生活困窮者を身近にみることで、幕府体制の行き詰まりを感じ、天皇を中心とした新しい時代こそが人々の生活を豊かにすると信じ、勤皇思想を深めていった。七郎の学びは国学が中心であり、これは新発田藩の領内では新津地区大庄屋である桂家の国学者との親交が関係している。それ以外の地域（村）で国学教授が行われた形跡はない。桂家は元々加賀大聖寺の出身であり、関ヶ原合戦後の移封により、溝口家とともに新発田藩の新津地区に赴任した。加賀大聖寺と言えば、京都とも近く交流があることから主に国学普及のあった関西地区から流入があったものと考えられる。北越戊辰戦争ではいち早く庄屋職を辞し、門弟とともに農民隊を組織し、領内における米沢藩や会津藩との戦いに従軍した。若い頃、国内各地を交遊していたことから越後国外の人的交流は極めて盛んであった。それ故、明治維新直後において10代の会津藩士2人を自邸で匿っている。これは会津戦争で敗れた会津藩士秋月悌次郎が、新政府軍の奥平謙輔（長州干城隊）に懇願し、これを七郎が受け入れた。2人のうちひとりが山川健次郎であった。山川はのちの大山巖元帥の妻となる捨松の兄である。山川は物理学者となり、東京帝大総長、京都帝大総長、九州帝大総長を歴任した。

5. 越後国における他地域の私塾

新発田藩領内にある私塾だけが例外ではなく、越後国内では全国レベルに劣らないほどの民衆も対象にした私塾が少なくなかった。

5.1 長善館（燕市粟生津）

長善館は今で言う各種学校扱いの私塾であり、その地方・その時代に相応しい教育を行う教育機関だった。主に

民衆の学舎が担当し、仁義礼智信など儒教の徳目に沿って教授され豪商豪農の子どもが主として学んだ。江戸時代末期、政治の安定しない世相の中で私塾は急激にその数を増やしていく。塾主（長）の深く時宜を得た学問・実学、また高潔な人格に引かれて好学有為な若者が入塾した。本塾は天保期の1833年燕市粟生津に開校された。創始者の鈴木文臺以降三代に渡り80年間教育を施し約千人の門弟を抱えた。主に村の庄屋・社寺・医家が子弟を送り込み、親の期待に応える在地性の濃い塾だった。初代塾長の文臺は、人を思いやり人の心を容れて人のために尽くせば、それまでに大きな自分に遭遇することができるという古代中国の徳政思想を学んだ。近くにいた良寛からの影響もあり、大きな心や人間愛の心を身につけた。加えて文臺は、一つの学問に限らず地元に合う内容の中から学び取る折衷学を取り入れた。村のリーダーとしての素養を「地域や住民を思い、住民のために尽くすこと」であることとし、如何に徳のある行動をするかにかかっていると説いている。長善館の教育方法として5つの方針があった。

1) 全寮制の採用 塾主は学問を教えるだけでなく、寄宿舎全体を通して人間的な繋がりを深め、師弟一体となって人間形成に大きな役割を果たした。

2) 都講制度の採用 指導者が全ての塾生を見切ることは不可能であり、勉学が進んだ先輩が後輩を指導するという塾内チューター制度を導入した。この関係は卒業後にも継承され同窓の協力関係があった。

3) 実践主義 本塾の学習は漢文から始まる。「読書百編、意自から通ず」を実践し、素読の重要性を説いた。音読素読を通して文字を書写しながら唱える方法を実践させた。

4) 質疑応答の採用 学習過程において質問の時間を設けた。「学問とは学びを問うと書き、問うて学ぶとも言う」質問応答は褒賞主義的にも積極的な学習態度を育てるためにも意図的に設定された。

5) 輪講の採用 自由研究も含めて各自が前以て学習・探究してきたものを順番に講義・発表する時間である。質問、意見、論争を通して刺激合いを通してライバルを育てる目的でもあった。しっかりと聞き取り、考えをまとめ、意見や考えを伝え合い、励み合うことを通して人格や徳性を磨くことがこの授業のねらいである。

5.2 三余堂（柏崎市南条）

開設者で塾長の藍澤南城は、1792年片貝村（現在小千谷市）の朝陽館の教授（二代目）であった藍澤北溟の長男として生まれた。その後父が病没したため、母の郷里である南条村（現柏崎市）に移った。その後、一時期朝陽館に学んだが、15歳の時に江戸に出て、父と同門の松下一斎の葛山塾で折衷学を学んだ。1819年郷里南条に戻り、翌年私塾三余堂この地に開いた。在野の儒学者として生きた南城の考え方を端的に表した塾名と言える。南城の質実な学風、厳格な教えが人々に慕われて、越後の諸郡からはもとよ

り、津・能登・備前等からも門人が参集した。1860年までの門人録には723名の門人が記されている。後年、三余堂は明治政府から粟生津村（旧吉田町）の長善館と並び、北越の文教を振興した「私学の双璧」と認められた。当時の私塾の講義の主流である漢学（基本折衷学）のみならず、詩を好んだ南城は、生涯に2,000編に及ぶ詩作を試みた。併せて本塾では土地がらして農民の子弟の入塾も少なくなく、彼らは漢学（儒教）を通して農業に関する実学にも精通できるようになっていたのが、他の私塾との違いとも言える。藍澤南城は開塾以来、ほとんど南条の地を離れずに教育に没頭した。南城没後、三余堂は養子朴斎によって引き継がれた。その後の学制の公布に伴い塾は閉鎖されたが、南城の孫の雲岫は再興を期してその後、藍澤義塾を発足させ、藍澤義塾は1897年まで続いた。三余堂も前述の長善館同様に寄宿舎併設であり、塾長と共に塾に住み、掃除・洗濯・食事の支度など毎日の生活を自分たちでやりながら学問を続けた。休日には塾生と塾長が田畠を耕す等をして食を得る等をし、越後国内の私塾としては塾長と塾生の間は近いように感じる。日本国内最初の公立小千谷小学校の開設に尽力した山本徳右衛門も、この三余堂で12歳から6年間学んでいる。彼は小千谷村生まれで家は有名な小千谷縮を扱う商家であり、豊かな暮らしで育つが、その後家は廃業している。寄宿しながらの三余堂では主に儒学を学ぶとともに、その他興味をもったのは神道学であった。その後は小千谷村に戻り小千谷村年寄役となるが、幕末期妻と息子を相次いで亡くすが、自宅を新政府の民生局に提供し協力を惜しまなかった。子ども達に自ら教育をするだけの学識がありながら目指したのは、公立小学校の建設・開設であり、山本人はあくまでも影の存在として学校経営に奔走した。明治に改元した翌月の10月1日に公立小千谷小学校の前身の振徳館を開校し、全国初の公立小学校を誕生させている。単なる私塾なら容易に開設できたものを山本はなぜ公立小学校に拘ったのか、それは廃墟になった隣接する長岡藩から焼け出された子ども達を含めた諸藩の子弟を収容し保護し、教育を施すためであった。そのためにも新政府の認可を必要とする公立小学校の設立を目指したのであった。この信念と志とともに、対外的な交渉術や折衝能力に加え、新政府への学校の許認可に向けての上申書等の作成を含めた事務的能力が許認可を受ける際、申請先に良い印象を与え信用度も増し、三余堂における学びの影響は多大であったと推測できる。

5.3 朝陽館（小千谷市片貝）

江戸時代天明期において、地元の豪商や寺院住職らの相談によって設立された全国的に珍しい村塾である。明治政府の学制施行によって片貝小学校に引き継がれるまでの約一世紀、その間に中断することはあったが、8代の塾主によって村塾として稀有で程度の高い教育が行われた。従つて、他の町村から学ぶ者もいた。歴代のほとんどの塾長は越後国外から招聘された。それだけ資金が必要な越後国唯

一の村塾だが、なぜ片貝が設立できたか次のように推測できる。①穀倉地帯にも属し稻作が盛んに行われていたとともに、酒造メーカーが古くから複数存在し、第一産業及び第二次産業が共に盛んであったことから村自体が裕福な環境にあった。②信濃川流域に近く加えて江戸へと向かう三国街道にも近いことから、物流及び人的交流の拠点でもあった。③上記のことから学問への機運が高まる要素を持ちえた。この村塾は今で言う公立扱いであった。それ故に明治維新後の数年間先駆的に存在した教育機関であることから、ある意味全国的には郷学校（郷塾）だったとも言える。近世の武士身分の男子だけに制限された藩校と異なり、郷学校（郷塾）階級的かつ性的な差別のない四民平等の開かれた塾であり、また個人開業の私塾や寺子屋とも異なる。人民共立の授業料無償を原則とする学校を目指していた。ただ、人民共立という設置形態は近代的であった。

6.まとめ

6.1 江戸時代中期から幕末維新期までの民衆教育の重要性

1) 新発田藩内の私塾と他藩等の私塾との比較考察 新発田藩領内以外において特筆すべき3つの塾を紹介した。前半2つは完全なる私塾であり、どちらも教育方針の一つとして地域性を考慮し加えて広く入塾生を受け入れていたことから「寄宿舎制」を取り入れた。ほとんどの藩校は通学制であったが、この全寮制は他の地域での私塾でも多く見られた。単に居住を提供し、生活スタイルを構築するだけでなく、共同生活を通しての人間形成の役割が大変大きかった。現代でも私立の中高一貫校において採用されているとともに、スポーツに特化した高校や大学のスポーツサークルにも見られる指導システムである。この寄宿舎制の場合、指導者も寄宿舎に同居することからも、師弟の信頼関係の構築に必要と考えられている。もちろん、新発田藩領内の私塾も寄宿制を採用していたものが少なくなかったが、他の私塾に比べ新発田藩領内における塾主の居住地域出身者の入塾生がほとんどであったので、寄宿の必要性もなかったとも言える。また、新発田藩領内では、やはり藩主の意向も強く藩の指定学問である崎門学が形式的でも新発田藩領内の私塾にも採用を命じられていたが、それに従わなくても罰せられることはなかったようだ。一方、前述で紹介した2つの私塾では幕末期多く見られた折衷学が採用されていた。一定の学問に頼らず様々な学問を自己採用することにより、個人の自由な学びを取り入れさせる土壤があった。これは藩校には見られない自由な校風が塾主によってあった。また、前述の長善館における「都講制度」と「輪講制度」については、特殊性をもつ多くの私塾で広く採用されていた制度である。都講制度はいわゆる上級学生が下級生を教えるチューター制度であり、現代の学力に課題を抱える大学1年次生に対する学習支援システムとして見られる。加えて、都講制度は江戸時代の寺子屋で

も一般的に見られた制度である。もう一つの「輪講制度」は、今のアクティブラーニングにあたり、ひとつの専門分野や話題などを数人の少人数グループで順々に講義・講釈することである。しかしながら、当時の質問応答において状況はもっと過酷であったように感じる。明治期以降の中等・高等教育では、教壇の教員・教官が教科書の解説をするだけの授業が主流であったことは否めない。とは言え、近年新しい指導法や学習法が取り入れているようにも感じるが、むしろ江戸時代の私塾の方が、実学的な指導が行われていたと言える。

2) 卒塾生が社会に与えた影響 越後国内の私塾が輩出した人材で特筆すべき事項は以下のとおりであるが、いくつか分類してみたい。寺子屋や私塾には入学・卒業という概念はなくよって現代のような「式」もなかった。それぞれの学習機関を去るに当たっては、塾生の判断によって行われていた。

イ) 戊辰北越戦争での功労 城下町の新発田藩領内の私塾に多く見られる。藩を思う気持ちと早くから尊王思想との交差により、領内を自分たちの力で護る思いが、学問を通して身についていったと言える。多くは自宅で私塾を開設する者がほとんどであった。残念ながら早世と新政府内部の闘争に巻き込まれ、最期は不遇の人生を送った者が少なくなかった。よって、それほど後世に伝えられていないのも事実である。

ロ) 政治功労 新発田藩領内出身の大野誠は中央政府の工部省にて日本初の鉄道事業に貢献し、のちに長野県令を務めている。現在の長野県内の主要国道等の整備や教育政策に力を注いだ。一方、長善館出身の二人は国会議員として新潟県内を走る日本最長河川の信濃川の大工事（大河津分水）の着工に尽力し信濃川の水害が激減した。

ハ) 教育功労 新発田藩領内の大野恵堂は地元に私塾を開設し、次男誠を指導するとともに、明治期を背負う政治家となる坂口仁一郎も育てた。曾我簡堂も同じく地元人材を養成し光晴塾を設立する。三余堂出身者の山本徳右衛門（比呂伎）は、前述のとおりである。

ニ) 産業功労 大倉財閥の創立者の大倉喜八郎である。渋沢栄一と並んで明治・大正期における近代日本の産業界の発展に寄与した。大倉は渋沢栄一と同様に多くの福祉・養護事業にも関わった。

6.2 時代の変遷による私塾の変化と終焉

1) 役割の変化とその後の状況 残念ながら1872年の日本政府による学制発布により、今の初等教育機関に当たる寺子屋や家塾を含めた郷学校（郷塾）は、新制度の小学校に移行されていくことから、従来の学び舎は姿を消していく。校舎は以前の家塾や郷学校を再利用するケースもあれば、地域にある寺院を仮校舎として使用されることもあった。日本政府は学制を発布し、学校設立に関する許認可は発行するものの、財政的援助は地方に行わず、新たな校舎を建設するには地元の有力者に資金提供させるなど、地元

表2 各私塾（越後国内）が輩出した人材の功績一覧

藩・地域	塾名	塾長	門下	門下の功績
新発田藩	積善堂	初代丹羽伯弘	大野恵堂	絆己楼の開設
〃	〃	〃	小川心斎	戊辰北越戦争時の功労者
〃	〃	〃	大倉喜八郎	大倉財閥創設
〃	絆己楼	大野恵堂	大野誠	長野県第2代県令
〃	〃	〃	坂口仁一郎	国会議員、坂口安吾の父
〃	なし	坂井経堂	曾我簡堂	光晴塾の開設
〃	〃	〃	曾我士郎	塾頭、戊辰北越戦争への従軍
〃	〃	遠藤七郎	—	塾長は国学者、戊辰戦功功勞
粟生津（燕）	長善館	初代鈴木文臺	長谷川鉄之進	戊辰北越戦争時の功労者
〃	〃	〃	大竹寛一	国会議員、大河津分水尽力
〃	〃	〃	萩野左門	〃
南条（柏崎）	三余堂	藍沢南城	山本比呂伎	国内初の公立小学校設立尽力

任せだったのが当時の日本政府の手法であった。地元住民も未来ある人材の育成のためにも、地元の名望家が基本的に立ち上がり各地で学校が建設されていった。中等・高等機関の役割を担った私塾も、公立の旧制中学校や国立大学の出現により、明治期末頃までは若干継続されていくが、指導者の死去等の理由により、地方にある私塾は廃業せざるを得なかった。その根底にあるのはやはり蓄積された財力のなさだったと推測する。幕末期に福沢諭吉によって創始された慶應義塾は、創始者死去後も残された財力と中央政府下にある知名度により適切に事業承継された。

2) 学制発布後の学校の特徴 現代にも続く学校システムと江戸時代の寺子屋や私塾のシステムとは異なっていた。変革する必要があった理由は以下のとおりである。

イ) 世界の近代化に追いつくためにはそれまでの鎖国から抜け出すとともに封建国家を廃止し、中央集権国家体制の下、世界と同様な帝国主義を目指す必要があった。ロ) そのための殖産興業や産業の育成、そして法治国家を目指すべく憲法の制定や内閣・議会制度の確立、加えて徴兵制の導入を通して兵力増進などを速やかに進める必要があった。ハ) 上記の政策実現には世界に肩を並べることのできる人材を喫緊に育成する必要があった。そのためには、全国統一した学校形態や指導内容（教科書含む）そして指導方法を確立する必要があった。日本国民が学ぶ日本語を国語と称したものこれが所以である。

3) 江戸時代の寺子屋や私塾の教育システムの特徴

①入学式や卒業式もなかった。②設立・開塾の許認可や届け出制度はなかった。③指導者の資格条件もなかった。④学年・学級的なものは存在せず、全員が同部屋で学ぶことから必然的に上級生が下級生を指導するという慣習があった。⑤使用教材は存在したが、それは塾によって異なっていた。⑥授業料等も塾によって異なっていた。⑦江戸時代の寺子屋には、盲児、聾啞児、肢体不自由児、知的障害児童等の障害児がかなり在籍していたという報告はあるが、私塾での事例は確認されていない。上記のとお

り江戸時代の寺子屋における特に発達段階にある児童に対する指導体制は、まさに現代の初等教育システムで呼ばれている健常児と障害児とのインクルーシブ教育と言え、温故知新的に教育や人材育成に関して、現代の学校教育体制は江戸時代に見習う必要があると考える。ただこれは、学校だけを責めるものではなく、社会教育における地域や家庭内教育の活性化が土台として求められると考える。

7. 最後に

明治初年の新潟県は、全国屈指の大県として政治・経済・教育文化の各部門とも全国をリードする位置にあった。それが故に新潟県の人口も増加の一途を辿っていた。つまり、人材育成の充実により産業（農業）が活発化され、それに伴い人口における自然増及び社会増も見られた。1873年における日本の人口調査によると、新潟県の人口は全国第一となり第二位の兵庫県を7万人ほど離していた。ところが、明治20年代後半以降からの新潟県は、急速に近代化していく関東圏・近畿圏などの太平洋岸側に立ち遅れ始め、次第に後進県つまり裏日本化への道を進むことになり、それ以後、我が新潟県は若者の関東・関西圏への流出に伴う社会減が止まることのない人口減を筆頭に一層日の目を見ない時代が続いている。とりわけ、中等及び高等教育においては他県に見られるような先進的なシステムや事業は皆無に等しく、教育行政は問題対応などの措置に留まっていると感じる。そんな中、最後に述べたいのが、旧新発田藩の領地だった現新発田市地域における現在の教育は、新潟県内でも劣悪化の一途を辿っていることである。これは国全体が超少子高齢社会であるという他力本願的な事由にすることだけでは済まされない現実がある。江戸時代幕末維新期の地方藩かつ外様大名藩であった新発田藩。その藩内における藩士並びに一般民衆の教育・人材育成システムは、今回の探究を通して「日本一」だったと主観的ではあるが、そう感じている。しかしながら、今の新発田

市を含め周辺自治体の教育システムには、幕末維新期当時に見られた良い意味での特殊性や奇抜性は、今の学校教育や社会教育においては微塵も感じられず、改善や充実の現状では見当たらぬように本研究を通して感じており、これは生まれ故郷を思う個人としても甚だ残念である。

謝辞

本修士論文作成にあたり、2年間その指導に当たっていただいた岩永先生を始めとする諸先生方から多大なるご指導を賜り感謝に堪えない。ここに厚くお礼申し上げたい。併せて、この岩永ゼミを通して出会った学びの仲間からも直接大きな刺激を受け、本研究に臨む際の気力等にもつながった。今後ともこのご縁を大切にし、今後の研究等に生かしていきたいと考えている。

文献

[1] 全国の伝承江戸時代 人づくり風土記新潟編 14頁～60、88頁～96頁、200頁～289頁 社団法人農山漁村文化協会 1988年

[2] 新発田市市史（下巻）新発田市史編纂委員会 新発田市 1981年

[3] 聖籠町町史近世編 新潟県聖籠町 2004年

[4] 豊栄市市史通史編 新潟市北区郷土博物館 新潟市 2019年

[5] 小千谷市史下巻 小千谷市史編纂委員会 国書刊行会 1981年

[6] 柏崎市史下巻 柏崎市史編纂委員会 柏崎市 1985年

[7] 長野県教育史 長野県教育史刊行会 長野県 1983年

[8] 信州教育史再考 伴野敬一 龍鳳書房 2005年

[9] 雪国・小千谷に生まれた日本最初の小学校 立石優 恒文社1995年

[10] 「藍沢南城の学問と教育」 458頁～459頁、372頁～388頁 村山敬三 汲古書院 2023年

[11] 佐久間象山の生涯 財団法人 佐久間象山先生顕彰会 1984年

[12] 塾の水脈 11頁～23頁、57頁～97 小久保明浩 武蔵野美術大学出版局 2004

[13] 私塾 近代日本を拓いたプライベートアカデミー リチャード・ルビンジャー サイマル出版会 1979年

[14] 日本を教育した人々 12頁～106頁 斎藤孝 ちくま書房 2007年

[15] 江戸の教育力 高橋敏 ちくま書房 2007年

[16] 私塾の近代「越後長善館と民の近代教育の原風景」池田雅則 東京大学出版会 2014年

[17] 江戸時代庶民教化政策の研究 山下武 校倉書房 1969年

[18] 新発田藩における庶民教育政策～教学精励者の表彰と社講制度の発達を中心として 山下武 早稲田大学 教育学部学塾研究紀要 1971年

[19] 近世私塾の研究 梅原徹 思文閣出版 1983年

[20] 日本近世教育史の諸問題 尾形利雄 校倉書房 1988年

[21] 新潟県史資料編1・2近世幕末編 新潟県1984年 学制百年史

[22] 文部省学制百年史編集委員会 帝国地方行政学会 1981年